

同志社
歴史散歩
長岡
桜井乾一郎



雪の長岡市街（大阪屋書店版「絵はがき」より）

備中高梁の松山藩に山田方谷という碩学があった。一日越後長岡の牧野藩の一青年が、諸国遍歴の途、尋ねて来て師事を懇請したが先生はなかなか請いを許さなかった。最後に「私は学修を受けると言うよりは、むしろ先生の作用を学びたいのです」と申出たので

釈然として快く許したと言う。これぞ北越戊辰の役に勇名を馳せた河合継之助であった。この役で長岡は手ひどく破れたりとは言え、よく戦後の窮乏に堪えて立ち直ることが出来たのは、昔から藩内に質実剛健の気風が溢れていたためであった。河合が方谷の門に学びたいと言った「作用」は今日の言葉で言えば「実際の生活の仕方」を指すので、先生の学風が「実学」に傾いていたところから、経済産業の面を学び取るうとしたことは疑いないところである。そのように牧野藩政の中心は儉約質素を旨として、ひたすら城下の産業を振興せしむることにあって、いわゆる文化面——すなわち遊芸・信仰——は二の次ぎにしたようだ。牧野の殿様が会津藩と一緒に京都詰を命ぜられた時、こんな話がある。まづ上洛して茶の湯を学びたいのだがどの流派を選ぼうかと考えた末、当時一番不振の宗偏流

を執ったという。理由とするところは、千家のような繁昌する流派に出入りすると費用が多かかり過ぎるといふのだ。それ故、今でも長岡周辺の中越地区は宗偏流が他流を凌いで行なわれている。

長岡は越後平野の中心に位し、産業と経済を掌握したが、中頃は石油の主産地として名をなし、その石油が不振になっても、商業は断然四隣を圧している。学問文芸の領域に至っては見るべきものがなかったのは家風の然らしむるところと言えよう。随って精神面に発展したことを聞かない。その中で有名な長岡学校を設立したことは記憶に留めるべきで、亡父のときはこの学校に学び、英語の教師は同志社の出身者であったと聞く。しかしその頃の英語の学力がどれほどあったものか、父が記憶を辿りながら語ったところによれば「僕らは学校でノー・エンキリ・ジョウ・サイド・メリー（Now uncle George, said Mary）と学んだものだ」。これで全般は推して知るべしだ。この長岡人にして笈を負うて同志社に学んだ者はなかった。かえってお隣の与板からは柏木義圓、三輪源造などが出た

のは、与板が新潟に近かったためと思われる。柏木氏は長く安中教会の牧師であった人、三輪氏は同志社中学の国語の教師で筆者などは同国人だと言うので可愛がられた。この人は和歌をよくし、その作は讚美歌の中に編入されている。（第四一二番）

長岡学校に聘せられた同志社出身の教師が何と言ったかは聞き洩らしたが、この地に教会が設立せられるようになってからは神学部卒業者が多く赴任した。米山貞二郎、宮川友之助、伊藤勝良、菱本与吉郎などの面々が相次いで伝道に当ったが、長岡は福音の種に取っては不毛の地で順調な成長を遂げられぬまま今日に及んでいる。

*

私の家は明治三十八年秋、新潟駐在の宣教師カルテス氏が米山牧師を伴って来られた。これが小出伝道の濫觴で、爾来デビス博士、カーブ教授など同志社に関係深い人々が訪れた。デビス先生が来訪せられたのは筆者が小学校の三年生の頃で、秋も深まり、霜が強く降った日と覚えている。同行のカルテス氏は、博士の老体をいといゴム製の大きな湯タンポを用意して来られた。その時博士が何を

話されたかは記憶に定かではないが、若かりし時、南北戦争に参加、北軍の連隊旗手をつとめ、弾丸雨飛の中を進軍した模様を語られたとあとになって父から聞かされた。ただ博士の口中は義園が多く、語られる度に、口の中に笛をしのばせているごとく、ヒョウヒョウと音をたてるので、その口許ばかり見つめていた幼児の記憶が残っている。座敷に挨拶に出た曾祖父の老体を眺めて、「私の父も七十歳の頃はこのような姿でした」と故国の亡父を偲び、涙を浮かべて語られるさまを見ては、新島先生の熱ある説得に動かされて、日本伝道を志し、千里を遠しとせず渡来せられた老兵の情熱に深く感じ入った次第である。

このこともどこまでが筆者自身の直接の記憶か、後になってから家人に聞かされたのが直接経験のごとく錯覚している領分がどれほどか不明である。カーブ教授は、はじめに新潟に來り、日本語を習得して同志社の教授になられたので、わが家を訪れられた頃は自由に日本語を話すほどにはなっていないかった。それが因となって、京都に行った時、教授のお世話になった。

*

私の家は、越後の小地主で昔は庄屋をつとめたので、事あるごとに村の人が集まる。そうすると、祖父が囲炉裏の横座に坐って、寺の檀中を離れてキリスト教徒になれとすすめる。そうすると寺領を小作に受けている者が、寺から小作を取りあげられるのを恐れて、帰依しようとはしない。結局、桜井一統全部を説得することには失敗した。それほど伝道に熱心な祖父をつかまえて孫の筆者が「お爺さん、キリストという人はどこの国に生まれたのですか」と尋ねると「そうさな、なんでもアメリカ人だろう」という返事、あきれて物が言えなくて引きさがる仕儀となる。しかし当時としては大胆な伝道であったと感ぜ入る次第だ。封建制度の強い越後、ボスの威圧で村中が信者にならなくてよかったと今にして考える。

父は村の小学校の校長であったが、信仰に熱心なあまり、左遷せられて山奥の僻地の学校に転任し、そこでさんざん苦勞して大正七年意を決して田舎伝道師となり、十二年間働いて眠った。今でも苦闘の中の越後伝道は続いている。

（大12大神卒・小出教会教師）